

一般調査報告書

ファンボロー・エアショーに日本の中小企業グループが出展

1 ファンボロー・エアショーの概要

2010年7月19日から25日までの7日間にわたって、英国ロンドン郊外のファンボローにおいて、第47回目となるファンボロー国際航空ショー2010（Farnborough International Airshow 2010:以降、エアショー）が開催されました。

ファンボロー・エアショーはパリで開催される航空宇宙ショーと1年ごとに交互に開催される航空宇宙産業の展示会です。航空・宇宙産業に係る展示会として世界的規模で開催されるものであり、ひとつの空港がそのまま展示会場になっています。広大な空港敷地をそのまま使って、民間機・軍用機を問わず本物の航空機が屋外展示されています。今年の屋外展示の目玉の



ファンボロー・エアショーの全景

の一つはボーイング社の最新鋭機787「ドリームライナー」で、アメリカ国外では初めて展示されるこの機体をたくさんの人々が大きな関心を持って取り囲んでいました。屋内展示のためのホールの中かでは民間旅客機用の小さなネジから巨大なジェットエンジンにいたるまでさまざまな航空機部品、さらには人工衛星なども展示されています。加えて、第二次世界大戦期のクラシック機・最新鋭のジェット戦闘機など、生産国や時代が様々に異なる軍用機が派手な空中アクロバットを披露し、民間旅客機も優雅なデモフライトを行うため、世界中の航空ファンが集まります。今年、アメリカの最新鋭ステルス機F-22など30を超える軍用機、エアバス社の巨大な最新鋭旅客機A-380などの旅客機数機



エアショー会場に飛来したボーイング787

がデモフライトを行って観客を大いに喜ばせていました。このデモフライトにもボーイング787が参加し、その様子はテレビでも連日放映されていました。

なお、主催者推計によれば、全会期7日間を通しての入場者数は約22万8千人、週末のパブリックデー(一般開放日)には2日間だけで約10万8千人が来場したそうです。

2 今年のエアショーにおける「売上げ」について

ところで、このエアショーが世界的に重要視される最大の理由は、具体的な商談が行われる場であるとともに、航空機部品等に係る調達・引合い情報が交換される重要な場になっていることにあります。そのため、開幕後5日間は各国政府や企業間での商談や情報交換のための「トレードデー」に設定されており、一般の人々に公開されるパブリックデーは週末の2日間のみになっています。トレードデー期間中には参加企業間の商談会が開催され、大小様々な商談が数多く行われます。大手の航空機メーカーもこのエアショー期間中に成約件数・金額を発表しており、特にボーイングとエアバスの間で繰り広げられる受注合戦の結果に注目が集まります。

この際、取引金額が大きいことに加え、軍事・防衛にかかわる機密情報が取り交わされることが多いことなどから、有力な企業は自社専用の仮設建物（「シャレー」と呼ばれます。）を会場内に設置し、商談・交渉を行います。また、特に企業間の調達・引合い情報の交換を支援する仕組み（企業に向けた有料相談会の開催、エアショー主催団体による企業間マッチング・サービスの提供など）も整えられており、このことは展示会における商談・情報交換の活性化に大きく寄与しています。

今回のエアショーに出展した企業数は40か国の1,455社に及び、用意されたスペースは完売したそうです。トレードデー期間中の来場者数は約12万人で、これは2008年の約13万人に比べて8%程度減っているようです。また、主催者発表によれば、期間中の成約金額は約470億ドルだったそうですが、これは2008年の887億ドルに比べてかなり小さくなっています。航空会社による機材更新のサイクルにもよりますが、やはり2008年9月以降の経済危機の影響も大きいものと思われます。

3 日本からも数多くの企業等が出展

今年のエアショーには日本からも44社・団体が出展しました。（後述のJ A I F出展支援事業参加企業を含みます）。なかでも社団法人日本航空宇宙工業会（S J A C）を中心に日本の大手航空機関連部品・工作機械メーカーが集まった日本ブースには7社1団体が出展してそれぞれの製品についての大がかりな展示を行い、日本の優れた技術をアピールしていました。

一方、日本では約40年ぶりになる国産旅客機MR Jの開発を進めている三菱航空機株式会社も専用の商談施設をエアショー内に設け、積極的な売り込みを図っていました。このMR Jは、航空会社や部品メーカーなどを中心に海外でもとても大きな関心を集めており、その販売状況が大いに注目されているところです。

4 産官連携によるエアショー出展支援事業について

今年には社団法人中部航空宇宙技術センターやグレーター・ナゴヤ・イニシアティブ協議会、中部経済産業局などが取りまとめ役となって全国の中堅・中小航空機部品加工メーカーの海外販路開拓を支援するエアショー出展支援事業「日本航空宇宙産業フォーラム（J A I F）」が実施されました。

この事業は、日本国内各地域で航空機部品加工に携わっている中堅・中小企業の海外取引の活性化を促すことを目的に、これら企業のエアショーへの出展支援を行うものです。全国各地の中堅・中小メーカーを中心に34社（1団体含む）が参加しましたが、

このなかには中部地域内に本社・拠点を持つ企業16社が含まれており、日本国内有数の航空機産業の集積地としての中部地域の面目躍如といったところです。

今回の出展支援事業においては、独自に設置されたシャレー内で主として次のような取り組みが実施されました。

- ① 日本から参加した各企業と世界各国の航空機関連企業との商談・情報交換会
- ② グレーター・ナゴヤ地域に集積する航空宇宙産業を紹介するセミナー
- ③ 世界各国の航空機関連産業クラスターとの交流会
- ④ 愛知県の航空宇宙産業を紹介するセミナー

これら交流会・セミナーには、日本、中部地域が誇る技術水準の高い航空宇宙関連製品に関心を寄せる企業が世界各国から参加したほか、海外各地域の航空機関連クラスターも参加し、活発な意見交換が行われました。

特に商談・情報交換会については、先に紹介したエアショー主催者が提供する企業間マッチングに基づくもののほかに、出展支援事業を支援する日本側の諸機関・団体・商社が取り持ったマッチングに基

づくものもあり、いずれも活発なやり取りが行われたそうです。また、これらの活動の結果、いくつかの案件については具体的な契約に結び付きつつあるとのことであり、我が国の航空機産業の振興において大きな成果をあげたと言えます。

〈GNIセミナー、愛知県セミナーの様子〉

出展期間中の7月20日には、愛知・岐阜・三重の3県で構成されるグレーター・ナゴヤ・イニシアティブ協議会、日本航空宇宙産業フォーラム及び社団法人日本航空宇宙工業会の共同によるセミナーが開催されました。このセミナーにおいては、GNI地域における航空宇宙産業の集積状況のアピールとともに、企業進出先としての優位性などが紹介されました。さらに、2012年に愛知・名古屋での開催が予定されている国際航空宇宙展（ジャパンエアロスペース2012）の開催概要についての記者発表も行われ、参加者の関心を大いに集めていました。（なお、2012年の国際航空宇宙展は、世界中の航空機関連産業クラスターの関心を集めており、今回のエアショーにおいても今から参加を表明している複数のクラスターに出会いました。）

また、7月22日・23日には、GNI地域の中でも特に愛知・名古屋を紹介するセミナーが開催され、本県の分厚い産業集積をアピールしつつ、県内に立地する航空宇宙関連企業の紹介、愛知県による航空産業支援施策の紹介などが行われました。特に航空



日本航空宇宙産業フォーラムのシャレー



GNIセミナーの風景

中関連企業の紹介の中では、今回の支援事業に参加した愛知県企業3社がそれぞれの得意とする技術・製品のプレゼンテーションを行いました。聴衆として参加した外国企業のなかには、このプレゼンテーションのなかで紹介された商品・技術に強い関心を示すところもあり、このあとに開催されたフリーディスカッションでも大きな話題になっていました。

なお、私たちパリ産業情報センターも、このエアショーに出展する企業のなかから愛知県に進出する可能性のある企業を事前に選び出し、この展示会の場で訪問しました。そこで現時点での県内の企業との連携の可能性などを話し合うとともに、将来における日本への進出可能性をインタビューしました。この結果、将来的に日本への進出を視野に入れて戦略を考えたいという企業に出会うことができたので、



愛知県セミナーの風景

今後も継続してアプローチしていきたいと考えています。

5 おわりに

今回のエアショーのような展示会は、各企業がそれぞれ自慢の製品を広く世に問う場であるとともに、企業同士の出会いの場・コミュニケーションの場でもあります。今回、日本からエアショー出展支援事業に参加された各企業の方々も展示会会期中に精力的にビジネスミーティングに参加され、自社の製品・サービスを広くPRするとともに、企業同士の連携の可能性を探られていました。このミーティングの結果が具体的な取引案件に結びつくよう、大いに期待したいと思います。また、パリ産業情報センターにおきましても、このような展示会の場を活用した企業訪問を続けるとともに、そのなかで発掘した進出有望企業との接触を継続し、ぜひ具体的な進出につなげていきたいと考えています。